

原種保育計画 虚無の混濁(スラリー)

【母性本能と絶頂の孕ませ地獄♡】

【気高き女王の完全なる尊厳破壊♡】

【数千人分の腐敗精液(スラリー) 高圧注入♡】

【オルガフロンティア】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

原種保育計画

「虚無の混濁(スラリー)」



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ
「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

第1章:無抵抗の降伏——泥濘に散る薄紅

聖暦2028年。

冷たく淀んだ泥水が、彼女の華奢な肢体を容赦なく打ち据えていた。

太陽の光すら薄暗くしか届かない浅海域の不衛生な岩窟。

かつて星の海を渡るほどの知性を誇った彼女たちにとって、このような浅瀬は決して近づかぬ下等な領域だった。

だが、誇り高き「聖域」はもう存在しない。

空から降り注いだ銀黒の獣。

星の爪。

絶対的な天敵（メテオ・ハーヴェスター）たちは、深い海の底までやすやすと潜り込み、彼女の同胞たちを次々と貪り喰った。

逃げるしかなかった。

群れを散らし、女王としての矜持を捨てて。

自らの強大な生体波動を極限まで抑え込み、この星の住人から警戒されず庇護を得られるよう選び取った、か弱く無防備な少女の姿。

色素を排した極端な白化個体（アルビノ）の意匠は、人類の庇護欲をハックするために計算し尽くされた完璧な擬態だった。

その肉体は度重なる逃走で限界まで疲弊している。

泥水に浸かってなお、星の瞬きを閉じ込めたような透き通る白磁の肌。

無数の擦過傷が痛々しく刻まれ、血が滲んだように淡い薄紅（ピンク）色を帯びた長髪は、今は潮と泥を吸ってひどく重い。

深海生物特有の血液特性が透けて見える生々しい色彩が、冷たい泥水の中で残酷なまでに無防備に晒されていた。

冷え切った岩肌に背を預け、彼女は身をすくませた。

追ってこない。

かすかな安堵が震える胸を満たす。

だが、その安堵はひどく短いものだった。

水面が不自然に波打つ。

岩窟の入り口から、鋭く冷たい人工の光が真っ直ぐに差し込んだ。

重々しい水音を立てて侵入してきたのは、あの天敵ではない。

黒い鋼鉄の装甲を纏った2本足の存在。

人間（ヒト）だ。

彼らの顔は無機質な装甲マスクに覆われ、冷たい機械の目が赤い光を放っている。

手には無骨な銃火器が握られていた。

息を呑む。

逃げ場はない。

背後は行き止まりの岩壁だった。

黒い装甲の人間たちが、一斉に銃口を彼女へ向ける。

だが、その無慈悲な動きが不自然にピタリと止まった。

照準器越しに捉えたターゲットの姿に、彼らの中に戦術的な戸惑いが走る。



「.....前方クリア。いや、待て。ターゲットを確認。.....女？ 生存者の娘か？」

「馬鹿な。こんな辺境の岩礁帯に民間人がいるはずがない。化け物の擬態（トラップ）を疑え」

「違いない。だが.....もし本物の人間の『はぐれ』なら、極上の拾い物だぜ。生体部品（ユニット）の適性があればボーナスが弾む」

装甲マスク越しの通信音声が交錯する。

化け物の残党を狩りに来たはずの岩窟にいたのは、泥と潮にまみれた、全裸に等しい華奢な少女だった。

警戒心を解かず、冷たい銃口は向けられたまま。

彼女はゆっくりと、冷たい浅瀬の中に両膝をついた。

泥にまみれた細い手を、胸の前で弱々しく持ち上げる。

完全な無抵抗の意思表示。

自分はただ天敵から逃げてきただけだ。

生存圏を脅かすつもりなど欠片もない。

人間たちが戸惑っているのは分かった。

この無害で華奢な姿を見せ、服従の姿勢を示せば、敵意がないことは伝わるはずだと信じていた。

毛細血管が透ける怯えたウサギのような赤い瞳で、黒い装甲を見上げる。

無機質な機械の赤い光と、血の通った生々しい赤い瞳が、冷たい岩窟の中で完全にすれ違っていた。

「油断するな。念のため、生体スキャンとID照合をかけろ。擬態なら即座に処理、本物の『雌』なら回収だ」

その時だった。

人間の持つ無機質なスキャナーが不快な電子音を鳴らした。

赤い光の網が、彼女の華奢な肉体を舐め回す。

光が彼女の胎の奥底を捉えた瞬間、けたたましいエラー音が岩窟に反響した。

表示されたのは、測定限界を完全に振り切るほどの極大かつ高純度の『オルガ・シグネチャ』。

彼女の存在そのものが放つ強大な生体エネルギーに当てられ、兵士たちの纏う強化装甲の人工筋肉が不気味な共鳴を起こしてギリギリと軋み始める。

威圧的なマスク越しに、通信機の無機質な合成音声が漏れ聞こえた。

『識別——特級生体目標。群れの中樞（オリジナル・クイーン）』

途端に人間たちの放つ空気に変質した。

それは未知への戸惑いではない。

沿岸部のしらみ潰しという退屈な残党掃討任務で、まさかこれほどの「大物」を引き当てたという莫大な恩賞への歓喜。

そして長年仲間を海の底へ沈めてきた化け物の「親玉」を見つけたという、粘つくような漆黒の憎悪の熱。

「ハッ……見ろよ。いけしゃあしゃあと、か弱いヒトの雌の姿に擬態しやがって」

兵士の1人が吐き捨てるように嘲笑った。

「そうやって無害なふりをして俺たちを誑かせると思っているのか？ 虫唾が走るぜ、化け物め」

ズン、ズン、と。

重い油圧の駆動音と焦げたオゾン臭を漂わせながら、黒い装甲が距離を詰めてくる。

圧倒的な殺意の波。

逃げなければ。

彼女が後ずさろうとした次の瞬間。

視界が激しく揺れた。

鈍い破碎音。

硬質な軍靴の底が、彼女の美しい顔面を容赦なく打ち据えていた。

「あ……っ！？」

水しぶきを上げ、華奢な身体が泥の中へ吹き飛ぶ。

鼻腔の奥で骨が軋み、濃い血と鉄錆の匂いが口内を満たす。

脳髄を貫くひどく重い痛覚。

理解を絶する理不尽な暴威。

反抗の素振りなど、ただの1度も見せなかったのに。

「痛……っ、あ……」

泥にまみれて咽び泣く彼女の薄紅色の髪を、鋼鉄の手が乱暴に掴み上げる。

頭皮が引き剥がされるような激痛に、細い喉から悲鳴が漏れた。

「ひっ、やめ……っ！」

懇願する唇に、再び容赦のない鋼鉄の膝が叩き込まれる。

圧倒的な野生の暴力。

彼女の未発達な小さな乳房が、柔らかな腹が、無防備に開かれた太ももが、憎悪に満ちた重い軍靴で何度も力任せに踏みにじられる。

彼らの怒声が岩窟に反響する。

世界を狂わせた元凶。

仲間を殺した悪魔。

浴びせられる言葉の意味すら、彼女にはまったく理解できなかった。

完全にすれ違う憎悪。

抗う術のない絶対的な暴力。

「ごめっ……ゆるして……っ」

声にならない謝罪だけが、濃い血と涙に混じって泥へと溶けていく。

意識が白く濁っていく。

髪を掴まれたまま、彼女の柔らかな身体は冷たい鋼鉄の輸送機へと引きずり込まれていった。

それが終わりのない地獄への入り口だとは知る由もなく。

ただ硬く冷たい床の感触だけが、彼女の絶望を包み込んでいた。

エコーズのP・O・D展示



連合では捕獲したエコーズを、試験的にPODで管理している。

P・O・D(公的規律展示ユニット)システムとは、世界統合連合(U.L.A.)が捕虜や規律違反者、スペシャルアテンダント(SA)を士官食堂やロビーなどの公的空間に直立拘束・展示するための装置である。

第2章:生きた標本と偽物の娘たち——切り刻まれる星の母

冷たく淀んだ化学的な溶液の中で、彼女の時間は凍りついていた。

聖暦2028年のあの浅瀬から引きずり出されて以来、彼女にとっての世界はこの最高機密施設『ヴォイド・チャンバー』の暗闇だけになった。

分厚い円筒形のガラス水槽の中央。

高濃度の酸素を含有したわずかに粘度を帯びる生体保存液で完全に満たされた空間。

彼女の華奢な四肢は頑強な鋼鉄のアームによって大の字に引き伸ばされ、両脚を外側へと大きく開かれた最も無防備で屈辱的な姿勢で完全に固定されている。

視界は無骨な拘束バイザーに覆われ、音も光も、重力さえも存在しない絶対的な虚無の空間。

絶え間なく管から投与される化学薬液が、高次生命体である彼女の運動神経と論理思考を泥のように濁らせている。

だが、それは苦痛を和らげるためのものではない。

彼女の肉体には、生命維持と基礎データ収集を兼ねた無機質な接続デバイスが常に埋め込まれていた。

最も恥ずべき尻の穴と尿道を容赦なく拡げたまま固定する冷たい金属群。

そこから絶え間なく流し込まれる微弱な電流が、彼女に常時弱い発情状態を強制し、逃げ場のない屈辱感を与え続けている。

肉体を拘束し抵抗の意思だけを奪い取りながら、痛覚ネットワークはあえて一切遮断せず、むしろ鋭敏に保ち続けるという悪魔のような調整。

30年。

人類が狂気のシステムを頼りに血反吐を吐いて星の海へと版図を広げていった長き歳月の間、彼女に与えられた役割はただ1つ。

『E型素体』と呼ばれるクローン人形を量産するための、生きた遺伝子資産（マスターコピー）。

終わりのない、段階的な拷問と搾取の日々だった。

第1段階は、生体構造の解析と肉体破壊。

無機質な駆動音が鳴る。

「あ……あ……っ」

液体で満たされた声帯から絞り出された悲鳴が微細な気泡の振動となり、水槽の集音センサーに拾われて、AIのフィルタリングを通してくぐもった音声として施設内に響く。

溶液の中で四肢を強固なアームに固定されたまま、彼女は小さく身をよじる。

氷のように冷たい機械化された自動刃（オートメス）が、白磁のような太ももの滑らかな肌に音もなく沈み込んだ。

鎮痛剤などない。

神経の束を直接引き裂き、骨膜を削り取るような鋭い激痛に、毛細血管の透ける赤い瞳が限界まで見開かれる。

ごぼりと不快な気泡が漏れ、細い喉が声にならない絶叫を上げた。

プログラムされた容赦のない刃は肉を深くえぐり、血と細胞の塊を正確に削ぎ落としていく。

透明だった溶液が、生温かい鮮血と鉄錆の匂いで瞬く間に薄赤く濁る。

消毒液の無機質な匂いと濃い血の匂いが、液体越しに彼女の嗅覚を容赦なく蹂躪した。

（耐えろ……。私は、星の海を渡る種族の母……。こんな下等な猿たちの暴力になど……屈するものか……っ）

痛みに意識が飛びそうになる中、彼女は誇り高き女王としての矜持だけで精神を繋ぎ止める。

だが、本当の地獄は肉を切り取られることではない。

刃が引き抜かれた直後。

えぐられた巨大な傷口が不気味なほどの高熱を帯び、ぐずぐずと蠢き始める。

エコーズという種の生存本能がもたらす、異常な再生サイクル。

失われた肉が泡立ち、細胞が狂ったように分裂し、無理やり繋がり直していく。

焼け焦げるような再生の熱と、体内を何万匹もの虫が這い回るような悍ましい痒み。

傷は瞬く間に塞がり、また新たな刃を受け入れるだけの美しい肌へと戻ってしまう。

永遠に尽きることのない、生きた標本。

痛みと再生のループの中で、赤く充血した瞳から涙を流すことすらもう何千回と繰り返した。

だが、人類の悪意はただ外側から肉を削ぐ物理的な痛みだけでは終わらなかった。

第2段階は、エネルギーと歌声の搾取。



「あ、あゝ……！ ひ、いいっ……！」

常時接続された基礎デバイスとは別に、容赦のない極太の電極プラグが、最も無防備に晒され続けていた秘裂の最奥へと暴力的にねじ込まれる。

太古の昔、彼女たちエコーズが自らのデッドコピーとして人類に組み込んだ「オルガ器官」。

その快楽に対する致命的な脆弱性（バグ）を、人類は完璧に解析し、逆手にとっていた。

計算し尽くされた発情薬の投与。

そして最奥の粘膜と神経の束を直接焼くような、強烈な電気刺激による「強制絶頂（フォースト・クライマックス）」。

どんなに気高い女王の精神を持っていようと、生態系システムとしてDNAに刻み込まれた物理的な快楽刺激には絶対に逆らえない。

強烈な電流が内側から子宮を打ち据えるたび、彼女の白磁の肌は急速に発情の熱を帯びて桜色に染まり、水中に揺蕩う薄紅の髪と視覚的に同化していく。

必死に保っていた理性が、圧倒的な快楽の波によってドロドロに溶かされていく。

「いやぁっ……だめ、でも、きもちい……っ♥」

誇り高き精神が、終わらない絶頂地獄によって完膚なきまでに粉碎される。

狂おしい快感の中でだらしなく白目を剥き、彼女の半開きの唇から零れ落ちる「歌声（大干渉の波長）」と、強大な「オルガエネルギー」。

それは連合の次世代兵器開発のための貴重なデータとして、1滴残らず搾取され続けていた。

そして第3段階。

尊厳の完全なる粉碎。

ただ無様に発情させられ、意識を奪われるだけでは済まされない。

オリジナルの自我を徹底的にへし折るための、悪魔のような精神的調教プログラム。

視界を完全に覆い尽くしていた拘束バイザーの網膜投影機が、不快な電子音と共に起動する。

絶対的な暗闇から無理やり見開かされた瞳に、おぞましい映像が強制的に流し込まれた。

無機質な工場（プラント）。

そこに並ぶ無数の培養槽の中で、機械のアームに縛り付けられているのは、自分と同じ瞳を持つ少女たちだった。

彼女から切り取られた肉片を苗床にして作られた、魂を持たない偽物の娘たち。

無数の赤い瞳が、虚ろに虚空を見つめている。

映像の中で、冷たい金属の突起が、無垢な少女たちの柔らかな秘部へと無慈悲な高速ピストンを叩き込んでいる。



「あ、あゝあゝッ……！ ひぎいいッ♥」

自我を持たないはずのクローンたちが、機械が与える強制的な快樂に白目を剥き、涎を垂らして激しく腰を跳ねさせている。

『個体番号E-1044、臨界超過。オルガ・シグネチャ消失。廃棄プロセスへ移行します』

感情を持たないシステムの合成音声が響く。

ただオルガエネルギーを搾り取られるための肉人形として蹂躪され、最後は一滴の体液にいたるまで効率的に分解され、無機質なタンクの中へただの『有機原材料』として吸い上げられていく。

次から次へと。

何十、何百という偽物の自分が。

首を振ろうとしても、拘束具は1ミリの逃げ場も与えない。

自分の一部から生まれた命が、ただの「部品」として機械に犯され、使い潰されていく地獄。

その光景は、30年という途方もない時間をかけて、彼女の誇りを根底からすり潰していった。

（私は……女王などではない……。ただ切り刻まれ、快楽に溺れさせられ、偽物を作られるだけの……肉の塊なのだ……）

痛みに震え、絶望に涙を枯らしながら、彼女は冷たい溶液の中でただひたすらに耐え続けていた。

いつか、この地獄にも終わりが来ると信じて。

だが、彼女はまだ知らない。

30年という途方もない時間をかけて強いられてきた、外側から肉を削がれる物理的な苦痛や、電氣的な快楽による搾取など――。

魂の奥底を完全に汚染される真の地獄。

その『原種保育計画』の幕開けが、今まさに、すぐそこまで迫っていることを。

ヴォイド・チャンバー(虚無の実験室)



最高機密の実験監獄です。

防音ガラスで隔離されたクリーンな無菌室の内部は、光や音、重力すらも制御された絶対的な「虚無」であり、被検体は全裸で強固な金属アームによって極限の恥辱姿勢で磔にされます。

主に『原種保育計画』の主舞台として機能し、液浸タンクの中で子宮へ極太プローブをドッキングさせ、何千人分の精液をブレンドした「汚泥（スラリー）」を高圧充填。

脳髄を直接灼く「強制絶頂」プログラムによって、抵抗する理性を快楽で粉砕し、人工オルガコア(A.O.C.)の原株を強制的に受胎・生産させます。

第3章:冷たい水槽と『死んだ命』——原種保育計画の幕開け

聖暦2058年。

いつものように拘束アームが駆動する重い油圧音が、冷たい水槽に響き渡る。

化学的な薬液の匂いが鼻腔を突き刺し、肌に撫で付けられる水流が鋭い冷気を伴って彼女の華奢な肉体を縛り上げた。

また肉をえぐり取られるのだと固く目を閉じ、鋭利な痛みに備える。

だが、限界まで開かれたまま固定されている白磁の太もも——その奥に晒された最も無防備な秘裂から、常時接続されていた無機質な基礎デバイスが乱暴に引き抜かれた。

ズチュユツ、と。

「あっ……あんっ……！」

突然の喪失感と粘膜が引っ張られる不快な刺激に、彼女の細い喉から無防備な喘ぎが漏れる。

30年間、微弱な電流で強制的な発情状態を維持され続けていた柔らかな肉壺。

長きにわたる搾取の証拠として、異物が消えてもぽっかりとだらしなく開いたままの赤い粘膜から、行き場を失った大量の愛液がとろりと零れ落ちていく。

そして新たに迫りくるアームの先端に、いつもの氷のような刃はなかった。

ガチンッと硬質な音を立てて、30年間彼女の視界を塞いでいた拘束バイザーが上へと跳ね上がる。

与えられた突然の光。

ゆっくりと目を開いた、毛細血管の透ける赤い瞳が分厚いガラス越しに捉えたのは、これまでの30年間で一度も見たことのない異様な装置群だった。

無骨な台座に乗せられ、水槽に横付けされた巨大なシリンダータンク。

そこから伸びる太いチューブが、水槽の内部へと無遠慮に侵入してきている。

チューブの先端に取り付けられていたのは、彼女の華奢な胎には到底不釣り合いな、鈍く光る極太の金属円柱（プローブ）だった。

得体の知れない威圧感と、内臓を押し広げられるような異物への想像が、細い背筋に本能的な粟立ちを駆け上がらせる。

その恐怖に應えるように、頭上のスピーカーから主任研究員の低く濁った声が降ってきた。

『30年だ。30年間、我々はあの偽物の娘たち（E型素体）で満足してやった』

男の声には、隠しきれない苛立ちと、粘つくような歪んだ歓喜が混ざり合っていた。

『だがコピーの限界だ。遺伝子が劣化し、使い物にならない廃棄品ばかりが増えた。その上、これからの戦略兵器（A.O.C.）を動かすには、抜け殻ではない本物の魂と産道が必要不可欠なのだよ』

彼女には、男が何を言っているのか完全には理解できなかった。

ただ、ガラスの向こうの悪意が、これまでとは決定的に異なる執着の熱を帯びていることだけはわかった。

『原種保育計画をこれより第3フェーズへと移行する。お前自身のその胎で、我らが兵器の心臓となる本物を産んでもらう』

「あ……」

声にならない微かな吐息が、細かい気泡となって溶液に溶ける。

巨大なタンクの内部で、何かがどろりと這い回るようにうねるのが見えた。

それは重く、濁った白濁液だった。

廃棄された偽物の娘たちから吸い上げた有機原材料を定着の触媒とし、ファームの最下層に繋がれた何千人もの男性たちから機械的に搾り取られた、精液の混濁（スラリー）。

愛や命を生み出すためのものではない。

極低温で保存され、個人の識別すらなく無差別にブレンドされた、死んだ遺伝子の汚泥だ。

『原種子宮への経路（ルート）設定。プローブ内へのスラリー充填、開始。対象のバイタル、正常範囲内』

感情を持たないシステム音声と共に、タンクが重苦しいモーター音を唸らせる。

おぞましい汚泥が太いチューブを通して、目の前の金属プローブの内部シリンダーへと、不気味な脈動と共にドクドクと充填されていく。

視覚的な異様さだけではない。

管を通して伝わってくる、生臭く不快な粘り気を持った質量が、いよいよ自分の内側へと迫る気配。

エコーズとしての彼女の根源的な本能（DNA）が、全力で警鐘を鳴らした。

あれは、触れてはならない汚物だ。

己の最も清らかな聖域を、致命的に汚染する猛毒だ。

「いや……っ、やだ……っ」

未知の嫌悪感に苛まれ、彼女は冷たい溶液の中で薄紅の髪を振り乱しながら、パニックに陥り激しく首を振った。

液体で満たされた喉から絞り出された声が、無数の気泡となって水槽を立ち上る。

30年間、どれほど肉を切り刻まれても、痛みを耐え悲鳴を上げるだけで、暴れて反抗することはなかった。

外側を削がれる痛みには、女王としての矜持と絶望と共に慣れきっていたからだ。

だが今は違う。

肉を切られるのではない。

自分の最も無防備で、たった一つ残された内側の聖域に、あの恐ろしい死の泥を詰め込まれようとしている。

未知の侵犯に対する圧倒的な恐怖。

肉をえぐられることなど比べ物にならないほどの、魂を粉碎されるようなおぞましさで、彼女の華奢な四肢を激しく痙攣させていた。

作品名：原種保育計画「虚無の混濁(スラリー)」

発行日：2026年8月2日

発行者：XYZ_L

連絡先：<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
